植村寞水。

琵琶を楽しむ会　八月例会　八月三日昼神戸中御影区民会館二階広間で開催。流汗淋漓の酷暑を克服して二嶋帝峰ー青山・逸題　田中鯉水ー白虎隊・寂光院　田中歡水ー壇の浦・花吹雪　楊嶽水ー菊水の旗・屋島懐古、以上二曲づつを熱演し充分楽しんで五時散会した。

平井春嶺氏のプロフイル　琵琶を後世に伝えるのが使命』。平井さんにとって琵琶は命だ。子供の頃から始めて五十二年間、人生の激流の中で琵琶は常に心を支えてきた。造船畑一筋に歩んできた平井さん「そろそろ琵琶一筋に打込んで後継者づくりに励みたいが・・・」と心境を語る。（中略）琵琶を始めた動機は〝元来蒲柳の質であった私は大工の頭梁の進言で義兄となった麻田光嶺師につくことになった〟というように厳しい薩摩琵琶を通じての体力づくりが主眼だった。大きな声を張りあげると内臓を鍛えるし、武士道を皷舞した正派を通じて日本の心が通い合うとか。

琵琶は桑の木で作られ絃は絹糸である。このためギター等の金属絃が感情を興奮させるのにくらべ絹の絃は人の心を落ち着ける効がある。洛北わら天神近くの平井さんの家から流れる琵琶の音は夕闇にとけこんで京らしい風情をかもし、心をうつ。役人、団体勤めは人の和が特に求められる。外柔内剛、常にえみを忘れない平井さんはこのような厳しい薩摩琵琶正派の稽古を通じてつちかわれたに違いなく椽の下の力持ちとして評価が高いゆえんである。だが稽古となると人柄がガラッと変ったように顔面に厳しさが漲る。稽古ごとで初級から高級へというのが通常だが「私は最初に一番むづかしい門琵琶を教える。そうすれば後が楽になるから」とスパルタ教育をとっている。盲僧が空で流した琵琶の心を入門者に焼きつける最良の方法だそうだ。

京都琵琶協会代表、正派薩摩琵琶四明会代表をつとめ西日本の重鎮だが後継者に頭を痛める。大正初期の全盛以後西洋音楽に押されて忘れ去られようとしていることに対し「琵琶を後世に伝えるのが私の使命。最近は喰わずぎらいの人もふえ一般の認識が浅くなっている。だから府県庁や新聞、放送局にバックアップして貰うよう働きかけたい」と抱負を語っている。（七月二十二日附日刊工業新聞＝弟子を前にして琵琶を膝に教授中の写真入りで掲載＝原文のまゝ）。

水藤枝水氏　心筋硬塞のため七月十三日東京巣鴨の久保田病院で急逝、享年八十一。故永田錦心師の直門として錦心流琵琶の発展に寄与した功蹟は大きく、又故水藤錦穣女史をして錦琵琶を完成させた蔭の功労者でもあった。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

予告

○ー京都琵琶協会九月定例茶話会　九月七日（日）午後一時会員平井春嶺氏宅。二十一日の秋季演奏会準備のため全員出席された し。尚役員諸氏は事前事項協議のため午前十一時（時間厳守）集合されたし。

○ー緻水会秋季演奏会　九月七日（日）昼一時大阪天満天神前朝陽会館。会員の外東京二人、名古屋三人、福井一人ゲスト出演。

○ー晴風会演奏会　九月十五日（休）夕六時1九時東京杉並区高円寺会館。

○ー各流派合同秋季演奏大会　九月二十一日（日）正午京都河原町広小路府立文化芸術会館三階和室（主催京都琵琶協会）。出演会員薩摩二、錦心流五、筑前六人の外東京前田秋声氏（西郷隆盛）並に名古屋石河旭豊穣（鴨川の露）長谷川旭鶴（竜の口）三輪桃水（雪晴れ）三女流ゲスト出演。

○ー筑前琵琶橘会全国大会　九月二十三、四両日（火、休）愛知県岡崎市勤労会館。

○ー異色の古典芸能演奏会　（別項参照）

○ー第二十六回琵琶を楽しむ会　十月五日（日）十時1十六時楽寿荘（京阪電車光善寺駅下車）。参加自由。

○ー薩摩琵琶正絃会演奏会　十月五日（日）昼東京交詢社ホール。

あとがき

三十六、七度という連日の酷暑が過ぎて漸く爽かな九月を迎える●夏に弱い編集子など文字通り一日千秋の思いで九月になるのを待ちに待った●京の祇園祭、大阪の天神祭が終り子供が喜こぶ地蔵盆が過ぎるとやれやれと思う。さあこれからが我が世の秋？　大いに琵琶を楽しもう●京絃読後感を寄せて下さる読者が段々多くなって嬉しく思う中に毎月の「予告」欄をもっと充実して欲しいとの御希望が沢山届いている●ご尤も千万で今後は出来るだけ御期待に副うよう努力するが読者の方達も演奏会その他の催し物を精々迅く且詳細に毎月五日迄にお寄せ頂きたい。

昭和五十年九月一日発行（非売品）
発行編集者　京都市津之江北町一一一ノ二三　植村寞水
〒569　高槻市　所　電話〇七二六（八五）六〇五一番　絃社

琵琶機関紙　京絃　第二五五号　京絃社

我が道を行く六十五年（二九）

西郷天風

その帰り道、中山鳳岳師はいかにも感概に満ちた面持ちで飯牟礼寿長翁の「九連城」を回想しつゝあったが、やがて「小敦盛」の節付け研究を思い立ち、〝明晩からでも取りかゝりたいが〟と私に協力を促がすのであった。そこで其翌晩から二・三時間づつ中山師宅に通うことゝなり、先づ素読して感情を盛上げる処や、力強く印象づける個所などを選び出してそれに適当な節を考え、お互いに唄いあってはそれに適合する弾法まで選定する等、私には曽てない重要な勉強となって、爾後歌詞の節付けに自信がつき興味をもつに至った。

丁度其頃、正絃会では副会長福本日南博士作の琵琶歌「旅順開城」と「愛国詩人ダヌンチオ」の二編を印刷し、正絃会員に配布された。その二編のうち旅順開城の方は、かの「蟠竜山に立昇る、雲はのろしの峯をなし、勃海湾に打寄する、波に皷の響あり」と洵に豪快なその謡出しの初めから聴衆をして忽ち夢中の人たらしめ、即座に人心を魅了する名文と云うので盛んにプログラムを賑わしたが、愛国詩人ダヌンチオの方はサッパリ演題に載らなかった。それは第三国に遠慮すべき個所があったかららしいが、私は彼の軍人ならぬイタリヤの有名詩人が、国際連盟の威圧に苦しむ祖国の窮状を見るに見かね、単身爆撃機を飛ばして難局打開の糸口をつくった、その勇気と果敢な行動を印象強く綴った名文に胸踊らせつゝ幾十回となく弾奏を続けた。

或時、神田クラブの鉄鈴会か何かに出演の直前、偶々来賓として見えられた弾法に於て当代随一の称を荷う能勢鉄矢先生から〝アドリヤ海の上空で墜落せぬようシッカリやるんだな〟などと椰揄され恐縮しながらも、私自身の節付で臆面もなく押通したものだった。

この二編には既に大先輩による節付がしてあるにもかゝわらず、勝手に改変することは後輩の立場を辨えぬ不遜の行為ではあったが、中山師初め鳳鳴会先輩達の黙認が蔭の力であったように記憶する。だがその歌も歌詞の文中に「国際連盟を振りかざす、米国の威に圧せられ、争いかねてぞいたりける」とある点を正絃会の幹部から注意を促がされ、余儀なく遠慮することとなり、今日では其歌詞さえも忘れて仕舞う始末となった。

兎に角この時代が琵琶の最も隆盛を極めた時だったろう、演奏会を催すにしても、会場の入口に立看板を出せば、それだけで定員二百名位の会場は必ず満員となり、今日の如き宣伝の必要もなければ、プログラムも立看板に出演者の名だけを書き示せばそれでよいので、内容も七名位の出演が最も理想的だったのは、量より質を喜び、長い歌詞でも心ゆくまで味うのが客の好みであったからで、それ故に、演奏会も優れた芸の持主を起用せねば弥次りおろされてしまう、それが亦芸の上達をうながす根元となり、名手も続々現われつつあった。

従って斯芸を志す若人も日増しに殖え、琵琶専門の楽器店も東京市内に五・六軒はあった。中でも三田村、小倉、石田など有名だったが、私は住所が近い関係で小倉心斉を好んでいた。しかし何といっても本場物が魅力で、遂に鹿児島の林宇助商店から一面求めたが、其頃荷作り運賃を含めて十三円五十銭で、しかも総桑だった。即ち「林月」作ともなれば何処の会に持参しても自慢に価するもので、それだけに亦弾奏の楽しさが以前に倍し、琵琶を抱く機会の多からんことを心に念ずるようになった。そうした事から、やがて目星し

い紘友数人と語らい、六盟会なぞと称えながら牛込神楽坂の中腹にある神楽坂クラブを会場として、月例会を催すようになった。

出演者は毎会多少の変りはあったが、常連としては若松霞城、狩野宗光、安田希山と私の外に女流のホープ大照秀子（現在紅会や正紘会で活躍の仲川秀邦女史の師匠）氏が同人として毎会出演を励んでいたと思う。このうち唯一人の筑前琵琶若松霞城氏は橘流ならぬ都留崎流の名手で、気骨のある豪傑肌の大男だったが、それに相応しい謡振りが人をひきつけていた。唯どういう訳か他の演奏会には出演を好まず私達の仲間を以て満足しており、不思議なことに、某子爵家の居候とのみで住所を明らかにせずじまいだった。又狩野宗光氏は仙台の産で家伝の秘薬を生業とし、いつも忙がしいなかに我が六盟会のメンバーとしての労力は惜しまず、琵琶も中々の名手だった。只彼氏忙がしいことを理由に「おかちん」の短曲を得意気に演奏すること度々だったが、北国仙台の御国訛で、南端鹿児島の歌を謡う所に面白味があった。その「おかちん」とは〝正月あ近うなる、でゝ（橙）は赤うなる、近所近辺、ドチンガタンと鳴響く、痛わしや餅どんは、かねの櫓にのせられて、白箸太郎の手にかゝり胸と背中をあぶられて、横腹プッとふくらかし、砂糖よ砂糖よと呼ばわりて、奥歯次郎にかみしめられ、のどの細道ふみ分けて、腹の獄屋に押込められ、千尋原をくぐりぬけ、菊の御門を押開き、かめ山城えと落ち給う、いたわしや餅どんは、当年とって四十九才、桜島のでこん（大根）畑の、あした の露とぞ消え給う。〟

私の音楽ノート（七）

水藤五郎

「ことば」(1)

語り物音楽の芸術素材である「ことば」について、私は多少の興味と関心を持っています。いや、それ以上に、持とうと努力しています。生々しい感覚を、語り手と聞き手が持つことに依って、はじめて生々しい芸の場が出来るのではないでしょうか。如何に語り手のみが精魂を傾けても、それが聞き手に伝わり得るものでなければなりません。一体となった場があるべきであります。「ことば」は伝える手段であると同時に、語りそのものでもあります。「日本のことば」はこれに適しているのでしょうか。

近時、マスコミを賑わしている〝語り的音楽であり、歌詞自体が一つの楽しむれる「港のヨーコ横浜横須賀」等は新らしい手段である様です。これは「ことば」の遊び、「ごろ合わせ」とか「しり取り」に似ているようでもあり、「あんたとの子の何なのさ」と云う繰返しの手法は、音楽的、芸能的なテクニックの典型例と云えるものであります。

「日本のことば」、いや日本人そのものと、極めて近い関係にあったと解されているアイヌには、アイヌ語によって連綿と語られる「ユーカラ」と呼ばれる長い物語があります。これらは、日本の語り物の存在と比較してみても、大変面白いことであります。「アイヌのことば」、そしてあの悲しげな「唄声」と「トンクリ」と称される紘の調べは、私達と近い関係にあるのだと云う事実を考える時、一層興味深いのであります。私達が「ことば」を考える時、その起源を考える必要があるのですが、割合いとそのことに無関心なのが常であります。それは余りにも「ことば」は自然であり、日常的であるからです。自分の会得している、いや、そう錯覚している「ことば」の発祥について、誰もが無関心であるとしても不思議ではないかも知れません。

然しこれは逆であって、日常的であり且つ自然であることについて、今後は注意深く自由奔放に、観察の眼を持つべきであろうと思います。英語、特に米語はその歴史定義を明らかにしています。則ち、イギリスから大西洋を渡ってアメリカ大陸に移住をした人々が、十三州を成立させたのが一七三三年、そして独立戦争を経て一七八三年、イギリスが正式に合衆国の独立を認めて、こゝにアメリカが名実共に生まれたのであります。これが歴史的定義であり、文献的に云う「ことば」の起源も、之を基準とするのであります。

これに引きかえ、日本語の起源は明瞭さを欠くものであります。歴史的定義のなさが原因となっています。それは取りも直さず、歴

史的定義のなさが原因となっています。いつ、どの様にして日本という国が生まれたのか、日本人そのものが、どうして生まれたものか判らないからであります。

近時の研究では一万年以前に、北は北海道から南は九州に至るまで、ヒトが住んでいたと解説されています。その根拠となった群馬県笠懸村岩宿での石器の発見は、一万年以前富士山の噴火によって積もったであろうと推測されている赤土層の中からのことであった故に、極めて確実性の高いものとされています。しかしこの時の「ヒト」が如何なる種類であり、今日の日本人の祖先であるかどうかは全く判らないし、「ことば」の存在も推測は出来ないようです。

更に時が下って縄文式時代に於ける「ヒト」、そして「ことば」の存在は、確実でありながらその詳細は不明なようであります。この「はっきりしない」と云う現象は、たまたまあった事実の様に思われますが、私にはどうも偶然とは思えないのであります。つまり、一つの運命のいたづらに見えるのです。日本の文化があいまいで非常に一貫性に欠け、良く云えばまろやかで、そして変幻自在なのは、このヒト、文化、ことば等の発祥の「あいまいさ」が、良悪に作用しているように思えるのです。これは極端な考えであることは承知の上で記してみたのであります。

私達は、日本のかなり広い地域にアイヌ人が住んでいて、それを追払いながら私達日本人の先祖が、北へ北へと住みついて行ったと教えられてきました。しかもその明かしとして、青森、秋田、岩手の三県にアイヌ語の地名を見出してきました。則ち沼宮内（ぬまくない）、毛馬内（けまない）、生保内（おぼない）、今別（いまべつ）、原別（はらべつ）等、その数は何百にものぼるようです。ところが、これも断定し得るものではないのです。はっきりしないのです。

「ことば」は文化の一分野ですから、文化の担い手の歴史が不明な段階に在っては「ことば」もそうであります。この現象は爾来二千年に及ぶ日本の歴史を支配しているように思えるのです。「はじめ良ければ終りよし」という格言に、その一例を見だしているのです。

（この稿続く）

残暑御見舞

日本民主同志会中央執行委員長
世界救世教外事対策委員長
日本郷友連盟本部理事

松本明重

〒607
京都市東山区山科日ノ岡堤谷町
電話〇七五（五九二）〇四〇四番
七五ノ十一

狂酔亭漫録（百十五）

細川藤孝忠興父子

古谷竟水

前三回に亘り記述した千利休処刑に、多少関連ありと見られる細川ガラシャ夫人の、夫忠興と、其父藤孝の伝を参考迄に紹介する。

細川藤孝（一五三四ー一六一〇）

歌人。姓源、族称長岡。小字萬吉、與一郎。玄旨又は幽斎を以て聞ゆ。天文三年四月二十二日に生る。足利将軍義晴の四男にして母は船橋宣賢の女なり。其母彼の出生前義晴により、三渕伊賀守晴員の許に嫁せしめらる。

即ち京都岡崎なる晴員の別業に其子として出生。七歳細川元常の養子となり、爾来養父と共に義晴に従う。義晴歿後、嫡子義輝将軍職を襲いしも、三好松永の徒に弑せられるに及び、義輝の弟義昭を奉じて近江に奔り、更に織田信長による。後義昭の将軍に補せられる迄、画策運謀、一に藤孝の力による。

斯て織田氏の世となり、次で豊臣秀吉徳川家康に至るや何れも重臣として遇せられ諸所に転攻、或は転封し、戦功少なからず、政治的にも多くの業績を挙げ、兵部大輔に任じ、従二位に叙し法印を授けられた。

藤孝生平尊皇の念深く、身は足利氏の出なれども、尊氏以来武門の専横により、皇室の

衰微せるを慨き、大義名分を明かにせんと志す。蓋し織田氏によりたる所以のものは、一に信長の忠誠に頼りて、皇道の確立すべきを思念したるに外ならず、その歌学の奥旨を究めし結果、愈々皇道尊崇の念を熾烈にし、武人としてよりも歌道の理解者として其大本を明かにし、其神髄を後世に伝えしは、斯学の権威、斯学の恩人と称すべく、遺業逸話の伝うべきもの又挙げて数うべからず。

二条家歌道の正系は、為世より頓阿、常縁、実隆、実枝等を経て藤孝之を継ぎ、実枝より「古今集」の秘訣を、又九条稙通より「源氏物語」の奥義を受く。慶長五年当時在住せし丹後田辺城の石田三成により攻囲せられるや、死期の遠からざるを知り、歌道伝授の書を悉く皇弟智仁親王の許に献ぜん事を請わしめしに、親王ひそかに上奏救援の議を以てせられ、天皇も亦藤孝討死せば斯道永く亡ぶべきを憂い給い、親王に仰せて和議を講ずべしとあり、則ち叡慮の趣を伝えしが、藤孝決然として奉答すらく、和を請うて開城するは武士の本意にあらず、依て存生の間に之を献ぜんと、古今相伝の箱に証明の状を附し、

古へも今も変らぬ世の中に
心の種を残す言の葉　藤孝

の歌を添え「源氏物語抄」「二十一代集」その他を宮中及び親王、烏丸光広、前田玄以等に献呈すべく使者に渡し、今は思い残す事なしと籠城の臍を堅めしも、再び叡慮の畏きを拝聞して遂に開城し、後京都に閑居、悠々風月を楽んだ。其門流には智仁親王を始め、光広、中院通勝、三条西実条等あり、而して歌道の正系は実条之を受く。著わす処、歌学式礼故実に渉り、「百人一首抄」「伊勢物語闕疑抄」其他多数に上り、家集を「衆妙集」という。慶長十五年八月二十日歿。年七十七

明治三十五年正二位を贈らる。

細川忠興（一五六三―一六四五）

細川輝経の嗣子。実は長岡藤孝の長子。母は沼田上野介光兼の女。永禄六年京都に生れ、童名を熊千代と云い、長じて與一郎と称し、後越中守と改めた。天正五年二月紀伊国雑賀の一揆が蜂起した時、父と共に織田信長に属し、和泉国貝塚に於て初陣の功に一揆の徒を追撃した。時に年十五。三月又藤孝に従って一揆の首領鈴木孫一持久の居城を攻めて之を抜き、次で松永久秀の属城河内国片岡城を陥れ、信長より自筆の感状を与えられたが、尚又久秀の居城大和国志貴、丹波国亀山、笹山、久下、過部、粟井、萱振等の諸城を攻めて之を抜いた。

六年其等の戦功を賞せられ昵近の列に入り、信長の嫡子信忠より諱を与えられて忠興と称した。其後播磨国神吉、志方、丹波国小山、大槻、高山、馬堀等の諸城を攻め、また荒木村重が籠れる摂津国伊丹、有岡城及び丹後国鬼嶽の城攻めに自ら敵兵を突き伏せ、首級を得るなど幾度の軍功あり、八年信長より丹後十二萬石余を給せられ、実父藤孝と共に同国八幡山城に居したが、ついで宮津に城を築いてこれに移った。十年六月信長が明智光秀のために本能寺に殺害せらるるや、忠興はその室が光秀の女なる関係上、父藤孝と共に光秀に招かれたが、これに従わず却って羽柴秀吉に志を合せ、秀吉より誓詞を得てその所領を全うしたのみならず、丹後国内の光秀の旧領を与えられた。この時に当って忠興はその室明智氏を離婚したが、後、徳川家康の扱いによって秀吉の命を以て再びこれを迎え入れた。十一年正月秀吉が瀧川一益の属将瀧川儀太夫を伊勢国嶺域に、佐治新助を同国亀山城に攻めた時、軍に従って奮戦し、四月賤ケ嶽合戦には海津口の押へとなっていたが、秀吉の命によって越前国に渡り、敵将柴田勝家の領地の浦々に火を放ち敵首を数多討取った。

次で十二年の小牧役には美濃国加賀野井城、同国竹鼻城攻めに功あり、十三年三月の紀州根来の陣には父と共に積善寺、太田の両城を陥れ、七月従四位下侍従に進み、羽柴の称号を許され、八月の越中陣、十五年の九州陣にはそれぞれ軍功を顕わし、十六年には少将に進んだ。十八年の小田原陣には、三月伊豆国韮山城攻めに従い、文禄の役には九番隊に将として、元年八月岩山城及び仁道城を陥れ、一年六月晋州城を攻め落したが、この時に於ける家臣松井康之の軍功は著しかった。

四年七月豊臣秀次の事あるや、忠興も加担した疑を蒙ったが、康之の尽力によって危機を免がれ、慶長元年九月参議従三位に昇進した。秀吉の死後は心を徳川氏に寄せ、屢々家康の居所たる伏見城警護の任に当り、五年正月には三男忠利を質として江戸に送るなど専ら家康の意を迎えたので、二月には豊後国速見郡杵築六萬石の地を加えられた。

同年六月家康上杉景勝を討たんとして東下するや、忠興は之に従い、七月石田三成挙兵の報を得るや、福島正則等の諸将と共に家康の先鋒と成って西上し、八月先づ岐阜城を陥れ、九月十五日の関原合戦には敵首百三十六級を得た。

十一月丹波国を収めて豊後国三十九萬九千石余を与えられ、同国中津城に居し、七年十一月豊前国小倉に移った。十九年の大阪冬の陣には、毛利、島津両氏押えの為に九州にあって参加しなかったが、元和元年の夏の陣には、藤堂高虎と共に平野に陣して軍功があった。元和五年閏十二月病によって致仕し、家を子忠利に譲り、剃髪して三斎宗立と号したが、正保二年十二月二日肥後国八代に於て歿した。年八十三。

今井兼平と粟津ケ原の合戦

辻　旭城

本年一月二十一日、今井兼平が寿永三年粟津ケ原の合戦で主君木曽義仲に殉じて、自刃してから七百九十一年目の命日に当るので、午後一時から粟津本廟で、近江人会主催のもとに法要が営まれ、役員である私にも出席してほしい旨の通知があった。

今井兼平は、朝日将軍木曽義仲の大忠臣であった。彼は信濃の国の権守中原兼遠の四男として生れたが、義仲が幼児より兼遠夫妻に養われたので、義仲と兼平とは乳兄弟で、義仲が木曽に兵を挙げて以来兼平は一度として戦に参加しなかったことは無く、横田河原を始め磐若野、倶利伽羅、篠原の各合戦に大功をたて、義仲四天王の随一として敵の心胆を寒からしめた。

兼平は義仲を主君と仰ぎつゝも兄弟の如く信愛し、その智謀と武勇とを以って、義仲に影の如く従って若楽を共にし、粟津の合戦では多勢に無勢、遂に刀折れ矢尽きて三十三才の若さで、義仲の後を追って壮烈な自刃を遂げた。

義仲の各地に於ける大捷も、兼平の智謀と剛勇に因るところ多く、山家育ちの若い野武士義仲が、たとへ一時であったにせよ朝日将軍の印綬を帯びるに至ったのも、兼平の補佐に依るところが甚だ尠くない。

今井兼平の姓は中原、今井は氏であって、正しくは中原四郎今井兼平である。この中原姓の源流は、遠く太古の国神贄持の子、大和磯城彦の後裔土市県主十市首の流れであるという。十市宿禰有象が、人皇六十四代円融天皇の天禄二年に中原の姓を賜ったのに始まり、

残暑御見舞

錦心流琵琶
甲田勧水
〒248 鎌倉市鎌倉山一五五六
電話〇四六七(三一)一九七七番

邦楽名紘会
西郷天風
〒156 東京都世田谷区経堂三ノ三七ノ六
電話（四二九）八〇八三番

琵琶と詩吟教室
日本旭会師範
中島旭穂
〒602 京都市上京区東堀川椹木町角
電話〇七五(二一一)四〇三三番

吉井良三
〒569 高槻市南総持寺町
公団住宅三〇ノ二〇四
電話〇七二六(九六)八五一六番

その子中原宿禰致時は天延二年朝臣を許され、致時の曾孫中原師遠の後流が兼平の祖父中原兼経で、その子兼遠の子が兼平である。

さて寿永三年正月粟津ケ原の合戦は、兼平が主君義仲のために僅か五百余騎を以て、源範頼の二万余騎を迎えて激烈な白兵戦を展開し、よく防ぎよく戦ったのは戦史上例を見ない壮烈な戦であって、兼平軍の供御瀬方面隊長源義弘、副隊長方等三郎、又篠原の戦で斉藤別当実盛を討取った手塚の太郎光盛や兼平の弟落合五郎兼行、その他多胡次郎家包、神和太郎弘澄など有名な武将が、殆どこの戦で戦死している。

近江八景の一に数えられる粟津ケ原古戦場は、約八百年を経た今日、会社工場が林立して名物の松並木も今は姿を消し、附近一帯は商店が軒をつらね、特に近年は兼平塚の周囲にまで住宅が建ち並んで、私の中学生時代〝兼平の塚とりまいて菜種かな〟ー子規ーを回想すると全く隔世の感が深い。

異色の古典芸能演奏会

軽浅浮薄な演歌や歌謡曲が全盛を極める今の世の中で、我国古典芸能の良さを一般に認識させるのを主眼として、昨年来想をねって居られた薩摩琵琶の普門義則氏が中心となって邦楽木犀会が発足し、その第一回公演会が九月二十七日（土）昼夜二回に亘って、東京日本橋の第一証券ホールで開催される。

近時兎角凋落の感が深い琵琶をはじめ伝統邦楽の底深い美点を、特に若い世代の男女に広く認識させるのが目的で、之がためこの催しに出演する人も主として若い人々を選び、若い視聴者と演者が一体となって楽の音にとけ込むのが狙いである。

演奏曲種と演者は次の通りで、異色の公演会として当日の盛会が予想される。

（出演楽器）箏、十七弦、三弦、一弦琴、平家琵琶、薩摩琵琶、錦琵琶、尺八、中国古箏、雅楽器十一種。

（プログラム）

昼の部（二時から、八百円）

六段の曲合奏、一弦琴、錦琵琶、箏曲、平家琵琶、箏十七弦田中均曲

夜の部（六時半から、八百円）

雅楽、箏尺八、錦琵琶、中国古箏、平家琵琶、箏曲、薩摩琵琶。

（出演者）阿部源三郎、北原康雄、水藤五郎、鈴木美恵子、砂崎知子、新倉涼子、西山陽子、橋本敏江、普門義則、和田祐子、日本雅楽会。

尚この企画について斯界の権威金田一春彦氏も大いに賛意を表し左の一文を寄せられた。

爽やかな秋風のもとに、楚々として木犀の花香る候、永いこと待たれていたこの会の第一回公開発表会が開かれるのは嬉しいことである。木犀会は普門義則さんを中心として各種邦楽の若手演奏家、研究家の集まりであるが、普門さんは私が東京芸大邦楽科で琵琶楽をテーマとする演習をしていた時に、実際の演奏をしてくださった人で、ある関係で会員には芸大出身の人が多い。プログラムで知られるようにこの中には、平家琵琶とか一弦琴とか、日本に数少くなっている楽器の演奏家もまじっており、また蜜蜂とか阮咸とか今演奏法のわからなくなっている古代の楽器を研究し、昔の演奏法を復元してみようという特志家もいる。音楽の演奏というものは耳に聞くと同時に、目で見てはじめて理解がいくものであるが、邦楽が義務教育の教材として取り上げられ、そういう知識を身につけることが日ましに必要になりつゝある現在、こうした会に出席して短時間の間に各種の邦楽を知ることができることはまことに幸せである。会員各位の壮挙に深い敬意を表するとともに、会の今後の発展を心からお祈り申上げる。

金田一春彦

琵琶東西合同一泊会

薩摩琵琶四明会・正紘会共催、現地世話役鶴彦会による首記一泊会は、盛夏の七月二十六ー七両日、静岡県袋井の火防第一の霊場、秋葉総本殿可睡斎にて催された。

可睡斎はお寺の名前で、山号を万松山と称し、曹洞宗屈指の名刹である。

約六百年前、応永八年に怨仲天闡禅師が開いた寺で、東陽軒といってたが、十一代目住職仙麟等膳和尚は家康の父、および幼少の家康竹千代丸を戦乱の巷より救い出したことがあったが、その後家康は次第に出世して浜松城主となった時、和尚を招き親しく旧恩を謝した。その歓待の席上にて和尚は無心にいねむりをされた。家康はにっこりして「和尚我を見ること愛児の如し、故に安心して睡る、われその親密の情を喜ぶ、和尚ねむる可し」といってそれ以来「可睡和尚」と愛称され、後に東陽軒を改造して寺号も「可睡斎」と改め、等膳和尚を住職に迎えた。又たびたび家康に安心を与えたという意味で、伊豆、駿河、遠江、三河四ケ国の総録司という取締りの職を与え、十万石の礼を以って待遇された。以来歴代の住職は高僧が相次ぎ東海随一の名刹として大いに仏法を広め、天下の「お可睡さま」といわれている。

古風ゆたかな山門を入ると、古松老杉森々として天空にそびえ、三十万余坪の境内には本堂、御真殿、奥の院、開運大黒殿、護国塔、大書院、斎堂、瑞竜閣等の伽藍が林間に甍をつらねて荘大の気宇がみなぎっている。

この立派な建物瑞竜閣に、東西並に現地薩摩琵琶人及びその家族ら五十余名が、七月二十六日午後一時集合し演奏者三十九名が抽籤順に次々弾奏、入浴後、精進料理の夕食を頂き、又弾奏、九時消灯就寝。二十七日朝四時半起床、五時半より本堂における勤行に連なり、身心浄化された清々しい顔にて本堂前で記念撮影、朝食後は残りの方の弾奏をし十時終了、「可睡斎からの供物と鶴彦会からの心を籠めたお土産とを頂いて、大変勉強になった一泊会を解散、三々五々境内を散策して袋井駅に向った。

（平井春嶺記）

（出演者と曲目＝順不同）重衡ー平井幸生　日本女性登山隊の偉業ー山木岳盛　赤星崩れー島津天嶺　光秀の最期ー平井春嶺　弾法ー辻靖剛　彰義隊ー大富士岳鮮　菅公ー八束一峰　花紅葉ー鈴木鶴謳　形見の桜ー鈴木鶴岡　乃木大将の歌ー仲川秀邦　吉野落ー清川嵐舟　月下の陣ー本橋仙舟　重衡ー正本溪舟　城山ー関口竜城　鶯の夢ー伊集院皷城　奇縁ー岡部錦蝶　別れの盃ー小林錦瀞　月下の陣ー山田叢雲　菅公ー松永初心　常陸丸ー伴野鶴風　潯陽江ー岡尾鶴城　老蘇の森ー青島晃苑　城山ー伊藤晃嶺　菅公ー石川晶評　児島高徳ー大石晃月　吉野山懐古ー太田福子　旅順懐古ー小野鶴彦　遠州灘を行くー小野しげよ　桶狭間ー小野ひろみ　平手監物ー柿沢晃峰　吉野の奥ー佐野智　足柄山ー染谷晃岳　壇の浦回顧ー高林愛子　城山の月ー竹原花子　金州城ー早川貞子　県居邸の一夜ー桧木美代子　由井正雪ー三上晃城　右府実朝ー村松源助　石童丸ー謡琵会一同。

武紘会・一水会多摩支部合同研修会

七月六日昼一時小金井市福祉会館。橘大隊長ー高杉洲靖　羽衣ー石井敦水　茨木ー中村修水　村上喜剣ー伊藤磐水　城山ー清水源城　小松の操ー伊集院皷城　小敦盛ー坂本錦道。以上演奏を終り六時閉会。

日本芸術琵琶　七月二十日昼一時東京西柏会七月例会　新宿柏ビル六階。定刻山崎錦幽氏の門琵琶並に伴流能勢西田風謡切第六第七弾法の連弾序奏に続いて掛合小袖曽我ー高田堂水・石田脩水　設楽ケ原ー青木晴城　乃木将軍ー山崎錦幽　西郷隆盛ー長谷川錦舟　石童丸ー杉山旗水　滝口入道及び安達ケ原ー脩水　演奏なしー若宮旭登、六時散会。尚八月例会は暑中休会。

祇園祭協賛　日本三大祭の随一京都祇園祭奉納演奏会　会後の祭りに古谷竟水氏の斡旋により京都琵琶協会協賛で過去二十年来毎年欠かさず七月二十三日に祇園八坂神社で奉納琵琶演奏会が開催され本年も同日各流派会員一団となって神霊に献奏した。夕五時一同本殿内に参集し神官の修祓を受けて礼拝、五時半から本殿前の能楽堂で演奏開始、演壇の後ろに屏風を建て廻し一般聴衆席には天幕を張って数十の長腰掛をしつらえスピーカーによって広大な境内に演奏を流したが椅子に掛けられない満員の聴衆は団扇片手に周囲に立って静かに伝統芸能の真髄を味わいつゝ一曲終るごとに拍手の渦を捲き起した。

梅雨明け当日の暑気は特に厳しく日中は三十五度迄水銀柱が上昇したが日没と共に涼気も加わり九時終演後冷房のよく利いた控室大広間に関係者一同が集り神社から頂いた神酒で乾杯、自出度解散した。

（演奏曲目と献奏者）湖水渡りー中谷濤泉　静ー水内嶷水　若き敦盛ー戸田旭公　坂崎出羽守ー植村寞水　常陸丸ー田中鵬水　本能寺ー牧南水　地震加藤ー荒木旭媛　北の庄ー矢吹旭美津　彰義隊ー平井春嶺　新撰組ー梅原旭濤　扇の的ー古谷竟水。

五州会　第六回演奏会を八月一日夕六時東京上野本牧亭に於て開催（演奏会　五百円）。本能寺ー原洲泉　景清(上)ー平井洲誠　同(下)ー荒川洲帆　乃木将軍ー山田洲鳳　石童丸ー前田洲月　舟弁慶(上)ー桑名洲聖　同(下)ー松崎洲陵　（以下来賓）紅壇の浦ー広瀬翠　木村重成ー小山田賞水。

京都琵琶協会　八月三日昼一時会員矢八月定例茶話会　吹旭美津女史宅。三十七度という今夏一番の酷暑で出席率悪く些か淋しい感があったが室内は冷房と扇風機で暑さを吹き飛ばして和やかに弾交したり九月の秋季演奏会の演奏曲目、出演順の抽籤や来賓演奏者の件などを協議し附近の料亭京みやこで夕食を共にして七時過ぎ散会した。（出席者）馬場鴨水、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、古谷竟水、平井春嶺